

## 倫理講義 2 キリスト教の誕生 パウロ

### キリスト教の誕生

イエスの復活の奇跡

イエスは処刑の3日後に再びあられ、40日間地上にとどまったのち昇天

原始キリスト教…使徒たちの伝道、ローマ皇帝による迫害（～3世紀頃まで）



イエスは単なる人間ではなく、神が遣わした1 救世主（＝ キリスト）とする信仰  
 ※人の子イエスから救世主2 イエス＝ キリストへと変貌  
 3 キリスト教の成立

### 1-3. キリスト教の誕生

**満点の極意** パウロが説いた原罪思想、イエスの贖罪論、三元徳（信仰・希望・愛）を理解しよう！

ユダヤ教徒であったパウロは、イエスの思想に触れ、回心し、イエスの思想を地中海世界に広めていった（異邦人伝道）。彼は、アダムとイブの楽園追放以来

1 原罪…人間の祖アダムが神の命令に背き、禁断の果実を食べる罪を犯したため、その子孫である人間は生まれながらに罪を負っているという考え。パウロが説いた。

2 イエスの 贖罪論…神の子であるイエスが罪人として十字架にかけられた本当の意味は、神が人間の罪（原罪）を義（許されること）とした証しであるという考え。

3 三元徳 信仰…イエスの贖罪は、神の義のしるしであると信じること。  
 希望…「神の国」の到来と救済を確信し、それを待ち望むこと。  
 愛…信仰と希望をわがものとするための愛（アガペーと隣人愛）

つまり 「どうして神の子イエスが十字架にかけられたのか？」これが、パウロの疑問。「禁断の果実を食べてはいけない」という、神様の言いつけを破り、リンゴを口にしたアダムとイブは、楽園から追い出された。アダムとイブの子孫が人間なので、人間は生まれながらにアダムとイブの犯した罪を背負っている（これが、原罪）。そこでひらめいた。神様自身が、原罪を帳消しにできるチャンスを与えてやればよい。つまり、イエスを地上に遣わすから、イエスを十字架にかけなさい。そうすれば、すべての人間の原罪を背負って、イエスは喜んで十字架にかけられる。イエスの磔は、贖罪の証なり！まさに、イエスの磔は、原罪に苦しんでいる人間を哀れんだ、ありがたい神様の愛の証なのだ。これが、パウロの考えた贖罪の思想。ここが出る！

**満点の極意** キリスト教思想では、アウグスティヌスとトマス＝アキナスの思想を理解しよう！

【教父哲学】

1 アウグスティヌス…古代最大の教父哲学者。著書→『告白』

(1) プラトンのイデア論をキリスト教に応用した。

(2) プロティノスの流出説をキリスト教にとりいれ体系化した。

神の国と地上の国との戦いという独自の歴史観を説く。

キーワードは→ 神の恩寵

(3) 三位一体説…父（神）と子（イエス）と聖霊は、その本質上同じという考え。

だから信じるのは一つでいい。また人間が救われるのは人間の意志ではなく、すべて神の恩寵によるものだ（恩寵説）。だから、神を信じなさいと。また自己愛がはびこっている地上の国に対して、神の国から遣わされた教会において隣人愛を学びなさいと（神の国論）。

つまり、教父哲学は、4世紀ごろ確立したキリスト教の指導者である教父が説いた教えである。プラトンのイデア論の応用は、イデアを神に、イデア界を神の国に、現象界を地上の国と解釈する。

また、キリスト教の三元徳をギリシア四元徳よりも上位にとらえた。

**トマス＝アキナス**…彼はスコラ哲学を完成させた人だ。

目的論的世界観…この世のすべてには目的があり、すべては目的に向かって進み、実現するという考え。つまり、トマス＝アキナスは、この世のすべては神によって目的＝運命が定められ、すべては神の定めた運命通りに進み、神の意志は実現する、と解釈した。

さらに、トマス＝アキナスは、信仰と理性、神学と哲学を区別し、信仰によって神学が、理性に基づいて哲学が成立すると唱えた。そして、理性は信仰によって正しく導かれると主張した。

### センター試験に TRY！パウロ

罪深い人間の救済に関するパウロの義認の教えの説明として正しいものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 罪深い人間が義とみなされるのは、イエスの十字架の犠牲の做った身体的な苦行によるのみである。
- ② 罪深い人間が義とみなされるのは、イエスの贖罪に示された神への愛への信仰によるのみである。
- ③ 罪深い人間が義とみなされるのは、信仰・誠実・愛というキリスト教の三元徳のみである。
- ④ 罪深い人間が義とみなされるのは、父・子・聖霊の三位が一つであるという教義への精通のみである。

正解→②

**2017 本試 倫理・政経 アウグスティヌスの考え**

神と教会についてのアウグスティヌスの考えとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

- ① 教会が指導する聖書研究を通して信仰を深めることにより、神の恩寵を得ることができるとした。
- ② 人は神の恩寵によらなければ救われないと主張し、教会は神の国と地上の国を仲介するものだと考えた。
- ③ 教会への寄進といった善行を積むことにより、神の恩寵を得ることができると考えた。
- ④ 人は神の恩寵によらなければ救われないと主張し、免罪符の購入による救済を説いた教会の姿勢は間違っていると考えた。

正解は 2。

2 アウグスティヌスは、人間の救いが、もっぱら神の恩寵（恵み、愛）によるものであることを強調するとともに、教会が、地上の国における神の国の代理であると説いた。神の恩寵は一方的に与えられ、かつ与えられるかどうかは予め決定されているものとした。善行や信仰によって恩寵を得ることができるという記述は誤り。4 教会による贖宥状の販売を批判したのは宗教改革のルター。

**2019 追試 ユダヤ教やキリスト教の信仰**

次のア～ウは、古代におけるユダヤ教やキリスト教の信仰についての記述である。その正誤の組合せとして正しいものを、下の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ア イエスの活動以前から、ユダヤ教のなかでは、イスラエル民族を苦難から救う救世主（メシア）を待ち望む信仰が存在していた。
  - イ 初期のキリスト教会では、刑死したイエスがこの世の終わりにはじめて復活するとされ、そのことに対する希望に基づく信仰が生まれた。
  - ウ アウグスティヌスは、パウロによって基礎づけられた信仰・希望・愛の三元徳を、ギリシアの四元徳と等しい価値をもつものと考えた。
- ① ア 正 イ 正 ウ 誤
  - ② ア 正 イ 誤 ウ 正
  - ③ ア 正 イ 誤 ウ 誤
  - ④ ア 誤 イ 正 ウ 正
  - ⑤ ア 誤 イ 正 ウ 誤
  - ⑥ ア 誤 イ 誤 ウ 正

正解→③